

かな書き方式の生んだ罪

結果がこうもちがってきますと、原因は、やっぱり「歩け」方式と「あるけ」方式そのもののちがいにあると考えないわけにいかなくなります。そこでよくよく考えてみますと、やっぱり、あります。実にはっきりとした理由があるのです。

「歩け」方式では、「火・日・人……」ことばの一つ一つに当たって、そのことば固有の書き表わし方を学んでいきます。子どもたちは、いちばんはじめから、そういう書き方をちゃんと学んで、文字というものはそういうものだということを、最初から理解してしまいます。しかも、「火・日・人……」など、すべてのことばを、はじめから漢字で学んで知っていますから、まちがって使うというはずがないわけです。

かわいそうないまの一年生

ところが、「あるけ」方式では、はじめは、どんなことばでも、かなで教えます。だから、子どもたちは、なんでもかな書きする習慣が、でき

あがってしまいます。

それでいて、つぎに、「木」という字を学ぶと、「うえ木(植え木)」「つみ木(積み木)」と書かなければなりません。けれども「てん木(天気)」「木しゃ(汽車)」と書かなければいけないのか、それともそう書いてはいけないのか、ということになりますと、一年生の子どもたちには、この区別はなかなかつかないのです。

子どもたちは、「つみき」と書いて、「つみ木」と先生になおされます。そこでこんどは、「きしゃ」と書かないで、「木しゃ」と書きます。すると、こんどは、「きしゃ」となおされます。頭のよい子には、どうしてなおされたかわかるかもしれませんが、けれども、ふつうの一年生の子どもには、これではどうしたらよいのか、迷ってしまうのがあたりまえです。

昭和31年、わたしは「あるけ」方式をやってみて、教わった漢字を正しく使うということが、一年生にとってはどんなにむずかしいことか、はじめてよくわかりました。これでは一年生はかわいそうです。実にむずかしい、それでいてちっともききめのない勉強を、子どもたちはやらされているのです。